# 北海道FDSDフォーラム2022 個人発表一覧

| 発表タイトル | 発表者氏名 | 所属 | 発表概要 |
|---|---|---|---|
| コロナ制約下での正課外プロジェクト活動を通した学生の成長 | 長谷川　誠 | 公立千歳科学技術大学 | 正課外の学生プロジェクトチーム・理科工房は，20年間近くに渡って小中学校，認定こども園，各種イベント等で実験授業，科学教室，実験デモンストレーション等を積極的に実施しており，正課外活動が学生教育に有効に機能し得ることを示してきた。直近2年間はコロナ禍のために活動が制約されたが，そうした状況下での活動は学生メンバーに創意工夫を促す結果となり，学生の成長を促す良い機会となった。今回は，制約下での活動状況を紹介するとともに，困難な状況下での活動に対する学生の意識を探った。 |
| 苫小牧高専の教育におけるDX推進<br>～業務効率化と次世代教育の実践～ | 村本　充 | 苫小牧工業高等専門学校 | 苫小牧高専ではBYODを進めるとともに，2016年度から全国高専共通で導入したMicrosoft365を活用して，オンライン授業はもとより，各種申請のオンライン化やeポートフォリオの導入等を行い，教育におけるDXを推進しているので紹介する。また，オンライン授業用に作成した動画教材を対面授業で利用する新しい授業形態およびその成果について報告する。 |
| 「話す力」の向上を目指す授業におけるオンライン活用事例 | 鹿島　千穂 | 実践女子大学短期大学部 | 筆者は東京都内の短期大学において，「話す力」の向上を主眼とした科目を複数担当している。このうち2020年度にZoomを使用して同時双方向で行った科目の実践事例を報告する。授業後に実施した学生へのアンケートでは，オンラインの発表を通して学生たちが非言語コミュニケーションの重要性をより強く認識していたことが明らかとなった。「話す力」の向上に特化した授業において，オンラインでできることの可能性を提示したい。 |
| 反転授業を導入した医療系基礎科目の取り組み成果 | 昆　恵介 | 北海道科学大学 | 本報告では反転授業をベースにしたアクティブラーニングの実践例について報告する。方法はオンデマンド動画配信とEラーニングシステムによる知識確認ドリルによる予習を自宅で行わせた。また実際の授業では単元小テストを実施し，受験後に小グループになり，解答を教え合うというアクティブラーニングを実施した。結果として学習が習慣化した学生が増加し，平均点も上昇した。本発表では，分析結果を含めて報告する。 |
| 日本のFDの特徴と諸外国の先進的プロフェッショナル・ディベロップメント | 宇田川　拓雄 | 嘉悦大学 | 急速な社会変化により大学教員は就職前に学んだ知識・技術と就職後の経験だけで職務を遂行するのかが難しくなっている。大学教員にも他の専門職（医師，弁護士，建築家，看護師など）と同じく継続的な専門的能力開発研修（PD）が必要になっている。日本のFDは早い時期に制度化された固定的限定的で領域が狭い旧式のPDである。欧米の先進的PDのように教員個人がキャリアの各段階で自由に知識技術を学べる制度が望ましい。 |
| 北大DX-SD研修フィードバックから見る事務職員の業務DXマインド | 内藤　輝章 | 北海道大学<br>学務部学務企画課 | 北海道大学において全職員1,184名を対象に全5回20コマで構成されるオンデマンド型「DX-SD研修」を実施したところ，受講者数はのべ3,865名，平均受講率は約65%であった。コンテンツは主にインタビュー形式で，学内から総長・理事・管理職によるメッセージ等を，学外から道内企業・教育機関・自治体のCDOによる変革の考え方を収録した。フィードバックによれば，受講者のうち「DXに期待する」「自らの行動で変化を生み出したい」と回答した割合は約80%にのぼる一方で，不安要素として「組織風土が障壁」「専従部署を求める」「時間なくサポートが必要」「教員の理解と協力が不可欠」といった意見がみられた。 |
| 数学導入教育のオンライン化に対する初年次生の履修傾向の検討<br>―複数年度にわたる効果検証をとおして― | 辻　義人<br>田中　吉太郎<br>宮本　エジソン　正 | 公立はこだて未来大学<br>システム情報科学部<br>メタ学習センター / 複雑系知能学科 / メタ学習センター | はこだて未来大学では，数学導入教育の一環として，高校数学（数学IIB，数学III）に関する特別講習を実施している。本講習は，2019年度まで対面で行われた。しかし，2020年度に，COVID対策のためオンライン環境での実施に切り替え，2021年度までオンライン環境で実施した。本報告は，複数年度（2019～2021年度）にわたる数学導入教育の取り組み，また，その学習効果について報告を行うものである。 |
| 高等教育機関の教職員および学生のための異文化コミュニケーション能力（ICS）の開発 | マズル・ミハウ<br>ホイットフィールド・デール | 北海道大学<br>大学院教育推進機構 / 教育学院 | 現在多くの大学で，留学生の増加に対して，日本人学生の間での留学意欲の低下が課題となっている。これらに対処するには，留学生が大学でインクルーシブなメンバーとなること，そして日本人側も国際的環境に相応しいコミュニケーション力を獲得することが必要である。本研究はICSの育成という観点から，学部ゼミとFD研修のデータに基づき，参加の動機，ICSへの理解と応用について検討し，それを授業にいかに取り込むかについて実践的に考察する。 |
| コロナ下の学生対応・学修支援で活用したツールと問題点 | 井口　祐理子 | 北海道科学大学<br>学務部教務課 | 授業の一部をオンライン化したことにより，「学生が大学へ来る」ことが当たり前ではなくなった。学生対応・学修支援の実施方法を拡充せざるを得ない状況の中，学修支援システム，Zoom，YouTube，Googleフォーム，Eメール等のオンラインツールを活用した事例，抱えている問題点の他，オンライン化によって得られた知見を生かした今後の授業実施方法についても言及する。 |
| もしかしたら3年前より授業はよくなった?! | 斉木　ゆかり | 東海大学<br>語学教育センター | 海洋学部の留学生の「日本の文化・社会」という授業で数年前から『動物のお医者さん』という漫画を使用している。3年前は紙の漫画本を使用していたが，コロナで留学生が日本に来られなくなった期間は電子本を使って同期型遠隔授業を行った。2022年の4月から留学生が来日できるようになり，対面授業をしつつも，この2年間で利用価値を認めた電子本やアプリ（padlet）は今も欠かせない教材として使用している。本発表ではコロナの前と後でどう授業が変わったか，しかも良い方向に変わったかを報告したい。 |
| 北海道大学工学系部局におけるハイブリッド型授業の技術的サポート | 片岡　良美<br>角井　博則 | 北海道大学<br>大学院工学研究院　技術支援本部 | 工学系教育研究センター（以下，CEED）では2005年から，遠隔地に居住する社会人学生や，海外に長期滞在する学生など，多様な学生のニーズに応える仕組みとしてeラーニング教材を整備してきた。コロナ禍はオンライン教育の急速な浸透をもたらし，長期にわたり余儀なくされた講義形態の変容は，大学における学びのあり方そのものの再考につながりつつある。ポストコロナ期を見据え，コロナ禍におけるCEEDでの教育支援の変化を振り返る。 |
| オンラインフォーラムの裏側を見せます | 山本　堅一 | 北海道大学<br>高等教育推進機構 | 個人発表の空き枠を利用した特別企画として、本フォーラムの運営の様子をご覧に入れます。午前中のウェビナーを含め、一つの教室でオンラインフォーラムを運営しています。どのような機材を使っているのか等、皆さまの参考になるかもしれません。あるいは、皆さまから更なる改善案がご提示いただけるかもしれません。 |